

第3節 授業時数の確保と弾力的な運用の実践事例

総合的な学習の時間では、体験活動が重視され、学習活動が多様に展開される。場合によっては、校外でダイナミックに活動したり、季節や行事に応じて集中的に行われる場合がある。

したがって、1単位時間45分を60分などに変更する場合もある。また、毎週定期的に繰り返される時期もあれば、施設の見学や地域の人々へのインタビューなどで1週間あたり4時間と通常の倍の時間を実施したり、学習成果の発表を1日で集中的に実施したりすることなどもある。各学校においては、目的に応じた弾力的な単位時間や授業時数の運用による総合的な学習の時間を教育計画の中に適切に配当する必要がある。

事例① 固定時間割を工夫して運用した事例

I校は、年間の指導時間数が70時間となり、固定時間割に週2時間の総合的な学習の時間を位置付けました。そして、体験活動を行う場合に60分の授業、校外にでる場合には90分の授業としたりしてより学習効果が高まるように計画しました。また、週2時間の固定時間割では、体験を振り返ったり情報を交流したりするための十分な時間を確保できないことから、週3時間実施するなど、年間の指導計画を見直し、学年の話合いの中で柔軟に授業時間を計画するようにしました。

■ 単元「どんな人にも安心・安全な人・もの・こと やさしさみつけ」33時間

月 時数	時数	1	2	3
5月 10H	第1週	車椅子体験 (60分)	振り返り (30分)	
	第2週	〇〇公園のやさしさ見つけ (90分)		情報交換 (45分)
	第3週	△△公園のやさしさ見つけ (90分)		情報交換 (45分)
	第4週	公演の福祉マップづくり (90分)		
6月 8H	第1種	白杖体験 (60分)	振り返り (30分)	
	第2週	盲導犬と訓練士の方と交流 (60分)	振り返り (30分)	
	第3種	まちのやさしさみつけの体験		
	第4週	どんな人にも安心できる町か、町の中の調査 (100分)		振り返り (35分)
7月 4H	第1週	調査結果の話合い (45分×2)		
	第2種	夏休み自由研究の計画 (45分×2)		
	第3種			
夏休み		夏休み自由研究「町や身の回りのやさしさ」 出かけた場所で「人にやさしい町づくりの工夫」を探し、新聞や冊子にまとめる。		
9月 8H	第1種			
	第2種	夏休み自由研究報告 (45分×2)		
	第3週	やさしいまちにするために自分たちに出来ることについて話合い (45分×3)		
	第4週	自分たちに出来ることをまちにでて体験 (135分)		
10月 3H	第1週	体験報告準備・発表会 (45分×3)		

事例② 一年間を見通した弾力的な授業時数の運用例

《J小学校の概要》

- 児童数 648人 ●学級規模 22学級 ●教師数 32人 ●学区域の特色 商店街と住宅地(比較的新しい地域) ●総合的な学習の時間の主な内容 「地域への愛着」

■卒業に向けた実践で効果を上げた事例

6年生は、これまでかかわってきた地域の方たちとの交流を通して様々な人たちの生き方にふれ、これからの自分の生き方について考える学習を行いました。1学期は、地域に出かけ、地域の人たちの考えを聞いたり実際の仕事の様子を見学したりして、仕事への興味・関心を高めました。2学期は、互いの将来の夢について話し合い、具体的な職業をイメージし、その職業に実際に就いている地域の人のお話を聞く機会を設定して、自分たちの夢を具体的に考えることができました。そして、その仕事を詳しく調べたり実際に職業体験をしたりする活動を通して、働くことの意義について考える機会としました。こうして、児童は、将来に夢を抱き自信をもって進学することができました。

2学期は、体験活動が多いことから、固定時間割を週3時間に設定し、1学期と3学期の固定時間割は、週2時間として計画し、年間70時間の総合的な学習の時間の時数を確保しています。

月	1学期 (20時間)	月	2学期 (36時間)	月	3学期 (14時間)
4	「私たちの生活を支えている人たちから学ぶ」 ・これまでにかかわってきた人たちにインタビュー ・町の人たちの生き方にふれる ・報告会	9	「私たちの夢について考える」 ・自分たちの夢を語ろう、探そう(いろいろな職業) ・地域の人たちとの座談会 ・自分の夢や生き方を実現するための取材活動や体験活動 ・発表会	1	「未来の自分へのメッセージを考える」 ・自分たちにできること(ボランティア活動) ・未来の自分へのメッセージをまとめる
5		10		2	
6		11		3	
7		12			

■地域行事の関係で特定の時期に集中し効果を上げた事例

3年生では、地域への理解を深め地域への愛着を育てたいと考え、地域の町おこしとして始まった祭りを教材として取りあげました。祭りに参加した児童は、祭りの楽しさ、町の人々の努力、自分たちが町の人々に支えられていること等に気づき、参加できた自分自身に自信をもつことができました。そこで、この活動を3学年の総合的な学習の時間の主たる学習として年間指導計画に位置付け、7月の祭りに参加することを中心にした指導計画とし、時数の配分を工夫しました。1学期は、固定時間割を週3時間に設定し、2学期からは、週2時間の設定にして対応しました。

月	1学期 (36時間)	月	2学期 (22時間)	月	3学期 (12時間)
4	・祭りの由来を調べる ・祭りに参加する計画を立てる ・踊りを練習し運動会で披露する ・祭りへの参加準備をする ・祭りに参加する	9	・祭りのきっかけとなった姉妹都市について調べる ・姉妹都市の学校に自分たちの町のことを知らせるために、町のことを調べ、まとめる	1	・姉妹都市の学校に、調べたことを知らせる ・発表会を開き、保護者や地域の人たちにも伝える
5		10		2	
6		11		3	
7		12			
8					

第4節 学習環境の整備の実践事例

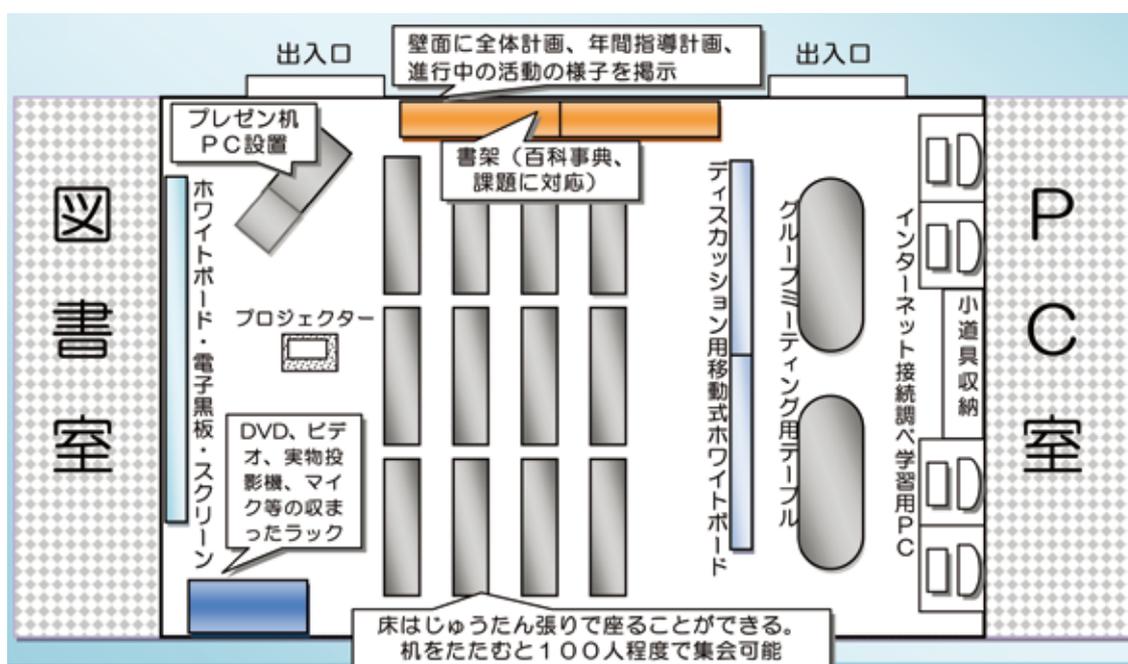
横断的・総合的な学習や探究的な学習に児童が意欲的に取り組み、そこでの学習を深めていくには、学習環境が適切に整えられていなければならない。

総合的な学習の時間では、ねらいや学習活動等が各学校で異なるために、一律に同様の環境を整備してもうまくいかない場合が多い。まず、各学校が総合的な学習の時間のねらいを実現するために必要な学習環境を明らかにし、それに向けた環境整備の工夫や努力をどのように行うかが求められる。

事例① 総合的な学習の時間推進委員会に使用することを主目的として余裕教室を整備した例

K小学校は、各学年1学級の小規模校です。学級数減による空き教室が生じたこと、校舎の一部改修が行われたのをきっかけに、図書室とパソコン（以下、PC）室の間に総合的な学習の時間で主に使用することを想定した「多目的室」を整備することとなりました。この多目的室の整備は、「総合的な学習の時間推進委員会」が自校の総合的な学習の時間の学習内容等を考えデザインしました。

整備にあたっては、床カーペット張り、ICT機器整備のための予算、一部PCをPC室から移動するための予算を教育委員会から配当された他は、校内にある備品、教材を集める等工夫をしました。



事例② 多様な学習活動に応じたオープンスペースを有効活用した例

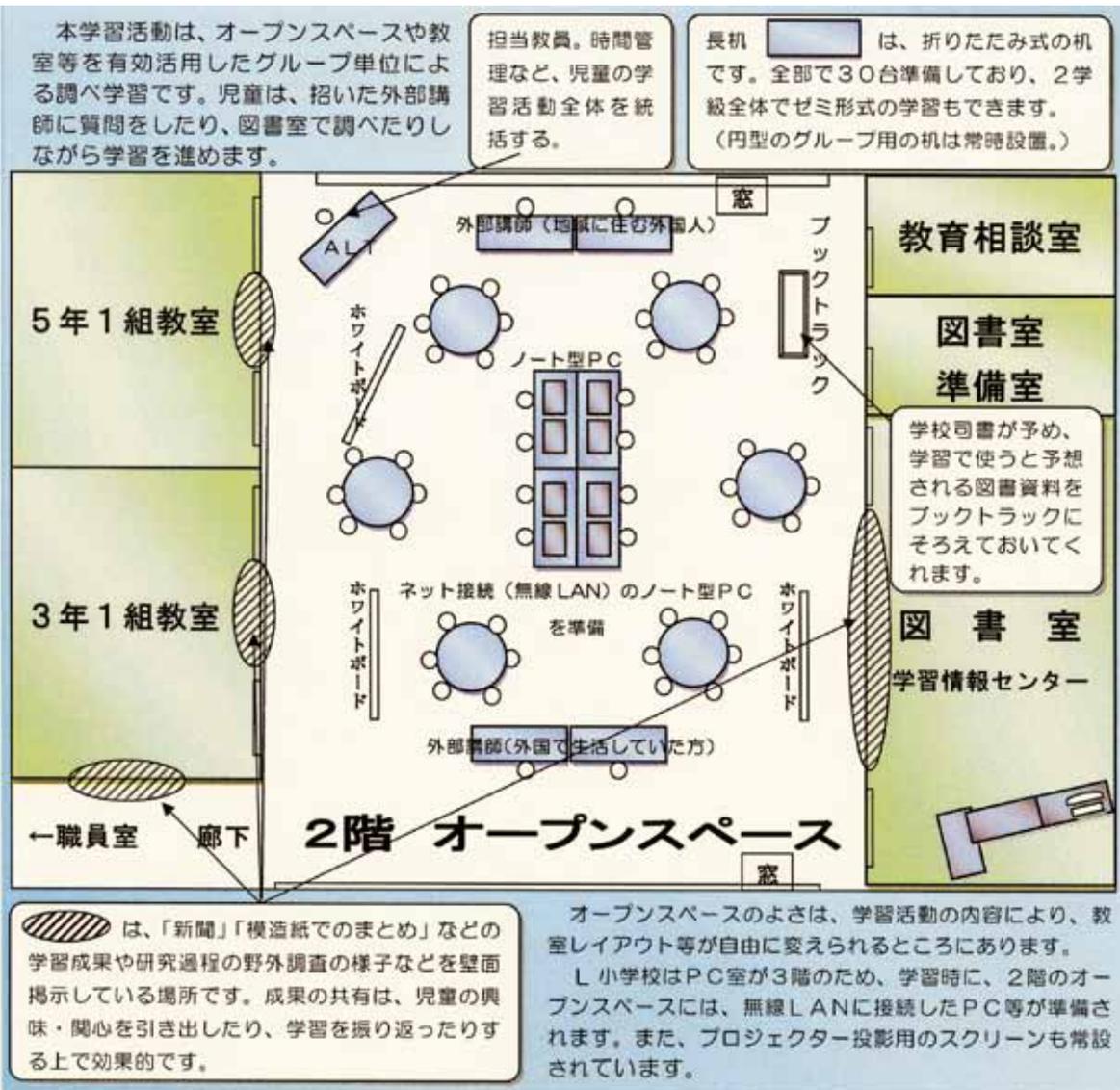
L小学校は、各学年1学級の小規模校です。12年前に校舎の改築が行われ、2階部分、3階部分の教室前に広場のようなオープンスペースができました。しかし、そのスペースは、学年の活動で活用されることがほとんどで、授業では、使用されることがありませんでした。

前任校で総合的な学習の時間コーディネーターであった教頭は、このスペースを総合的な学習の時間に有効活用できると考えました。そして、着任当初の4月に当該校の総合的な学習担当である第5学年の主任教諭に、自分自身が考えたオープンスペース活用案を、総合的な学習の時間推進委員会で検討し、各学年の学習活動の内容に応じて、実践してみるよう働きかけました。同時に事務職員に、オープンスペースで使用するミーティング用の机、椅子についての購入を相談しました。

推進委員会では、活用の仕方等について、様々なアイデアが出された他、各学年で学習活動の特性を踏まえ、オープンスペースを積極的に活用していくことになりました。

ここでは、第5学年の「国際理解」についての学習活動における活用事例を紹介します。

第5学年、国際理解についての調べ学習で活用した事例



事例③ 学習・情報センターとしての学校図書館の例

総合的な学習の時間を進める中、課題を解決したり、学習の中で疑問が生じたりしたとき、必要な情報を収集し活用できる学校図書館の環境を整えておくことは、問題の解決や探究活動を充実させるために大切なことです。

M小学校は、12学級の中規模校です。M小学校では、既存の学校図書館に検索用のパソコンやプレゼンテーション用の機器を整備し、「学習・情報センター」としての機能が充実した学校図書館となりました。館内は、落ち着いて個別学習ができる「調べ学習」のエリアと「読書」のエリアを設定しました。

学校図書館の準備室（スタッフルーム）の隣は、パソコン室、その向こうには、多目的室があります。児童は調べ学習の時、教師の指導の下、自由に近い形で行き来できるようになっています。



第5節 外部との連携の構築の実践事例

総合的な学習の時間では、地域の素材や地域の学習環境を積極的に活用することが期待されており、その実現のためには、保護者や地域の人々、専門家をはじめとした外部の人々、社会教育施設や社会教育関係団体等との連携・協力が欠かせない。

外部連携に当たっては、管理職、総合的な学習の時間コーディネーター等の担当者が中心となり、外部人材等と連絡・調整の機会を設定することが重要である。しかし、総合的な学習の時間コーディネーターが代わることで、それまで築き上げてきた結び付きが薄れてしまう場合も想定される。そのようなことが起こらないよう、校内に外部連携を効率的・継続的に行うためのシステムの準備が必要である。ここでは、外部連携のためのシステムや外部連携を適切に行うための配慮事項を記す。

外部連携のための5つの留意点

日常的なかかわり

・協力的なシステムを構築するためには、日頃から外部人材などと適切にかかわろうとする姿勢をもつことが大切である。

担当者や組織の設置

・校務分掌上に地域連携部などを設置したり、外部と連携するための窓口となる担当者を置いたりする。
・地域との連絡協議会などの組織を設置することも考えられる。

教育資源のリスト

・学校外の教育資源を活用するために総合的な学習の時間に協力可能な人材や施設などに関するリスト（人材、施設バンク）を作成する。

適切な打合せの実施

・外部人材に対して、適切な対応を心掛けるとともに、授業のねらいを明確にし、教師と連携先との役割分担を事前に確認するなど、十分な打合せをする必要がある。

学習成果の伝達

・学校公開日や学習発表会などの開催を通知したり、学校だよりを配布したりして、保護者や地域の人々に総合的な学習の時間の成果を発表する場と機会を設ける。

事例① 学校支援本部による地域人材バンクの例

平成20年、大都市にあるN小学校には、保護者、地域の人々により学校の教育活動全般を支援する組織「学校支援本部」が設立されました。

学校支援本部には、学校と地域との連携した活動を中心となって推進する学校支援コーディネーターが置かれました。現在、そのコーディネーターを中心に、学校の教育を支える人材の募集、リスト化（人材バンク化）、研修、派遣事務等が行われています。

このことにより、教師、児童は、総合的な学習の時間等に必要の人材等をコーディネーターに相談することで効率的に活用できるようになりました。学校支援本部は、区内の多くの学校で設置され、ネットワーク化されています。そして、人材バンク間の相互紹介がされています。

総合的な学習時間における

「学校支援コーディネーター」活用の流れ

教師が児童に学ばせたい学習内容、必要な人材等をコーディネーターに相談

児童が学びたい地域人材等を担任教師やコーディネーターに相談

- コーディネーターと教師が相談し、単元のねらい、内容に応じた人材バンクから適切な外部人材を決定する。
- 必要に応じ他の学校支援本部の人材バンクに連絡する。
- コーディネーターが時間等について招聘にあたっての連絡・調整を外部人材等との間で行う。

外部人材等との連携による授業が実施される。

授業後、コーディネーター、指導教師、外部人材等により反省会が実施され、次回の内容等の改善がなされる。

事例② 総合的な学習の時間が地域の環境保全活動を活性化させた事例

大都市周辺のニュータウン地帯にある〇町は、急激な宅地化が進んだために、地域の自治活動が、なかなか発展しない状況でした。近年、ニュータウンの高齢化が進み、学齢期の児童をもつ家族が減る傾向にあり、合計10学級を下回るようになってきています。

〇町のほぼ真ん中にあるP小学校は、総合的な学習の時間が始まった平成14年度より、「身の回りの環境とのかかわりを考えて行動する力の育成」を主な目標として学校の横を流れる河川や〇町の人々の生活を学習の場とする「地域の人々の暮らし」「環境」についての横断的・総合的な学習を総合的な学習の時間の全体計画等に位置付けています。近年、5年の間、総合的な学習の時間を通じた児童の育成を校内研究の対象としていたこともあり、現在まで年を重ねるに従ってその学習の内容は充実してきています。

第4学年では、河川敷での自然を調べたり、ゴミ等の種類を調べたりする活動をしたりしています。また、第6学年では、川にかつて多く生息していた「ホタル」が舞う町に戻そうという学習を市の環境保全課とともに進めています。また、第3学年から第6学年までは、河川敷のクリーン活動を指導計画に設定しています。

河原での学習においては、水辺の生物の解説や児童の安全確保のために、町内会の高齢者に協力をしてもらっています。平成14年当時、協力者は数名でしたが、自分たちの町の河川の環境を一生懸命に学ぼう、保全しようとする児童たちの姿を見るうちに、協力者は50名以上になっていきました。

協力者たちは、身近な河川の自然を守るための「川を清流に戻す会」というNPO団体を立ち上げ、児童等への授業協力だけでなく、中学校への出前授業、町内会と共催の河川クリーン活動日の企画・運営、ホタルの幼虫飼育と放流などを行うようになっていきました。

小学校での総合的な学習の時間の活性化は、地域での自然保護活動を活性化させるばかりでなく、町内会等の自治活動をも発展させていきました。

P小学校での総合的な学習の時間の充実は、自然豊かなまちづくりやコミュニティーづくりを大きく前進させました。

